

JICA 中国事務所ニュース

(2006年11月号)

1. 最近のトピック

(1) 第3回湖南省日本文化祭りに参加して

11月4、5日、湖南省内で日本語教育が行われている高校2校、大学12校が参加して行われた第3回湖南省日本文化祭りに出席しました。

日本語スピーチ大会、北京剣道同好会の剣道デモンストレーション、華道の実演等多彩な内容でしたが、特に日本語スピーチコンテストでは中国の学生さんの純粋な言葉に心が洗われる思いでした。



スピーチコンテストの様子

もともとこの日本文化祭りは3年前、当時の長沙日本語教師隊員2名の提案がきっかけで始まったものであり、当時の長沙隊員、調整員はこのイベントをどのように進めていくか、どのような規模で行うか、どの機関から協力を得るかを何度も協議し、大使館や国際交流基金、湖南省日本人会等の協力を得て第一回が湖南大学にて開催されました。

今までいずれも中心となってきたのは協力隊員でしたが、年々この行事が省内で浸透し、最近では中国側の日本語教師の積極的な協力も得られるようになりつつあります。この湖南祭りを機に、今年も中国人日本語教師の中で湖南省高等教育日本語専門委員会まで設立され、その成立式も行われました。その際にもこの委員会設立のきっかけとなったのは青年海外協力隊員の提案であったことが紹介されていました。今後はこの委員会が湖南祭り開催の主導的な役割を果たしていくとともに、湖南省全体の日本語教育発展の核となっていくと思われます。

このような省全体での日本文化祭りや日本語専門機関が省内で設立された例は今までにほとんどなく、



隊員による協力隊紹介

地方の日本語教育発展の一つのモデルとして注目に値するものです。当時の2名の協力隊員の提案からはじまった小さな芽が少しずつ膨らみ、今、省内の日本語教育全体に大きな影響を与えています。(ボランティア班/平野ゆかり)

(2) インドネシアでの研修

11月6日から11月11日までインドネシアへ出張に行ってきました。以前本部への業務出張の経験があり、その際は本部全体の雰囲気把握することができましたが、今回の出張では別の在外事務所のイメージをつかむことができました。さらに、他の事務所のナショナル・スタッフと横の繋がりができたことから、今後は他の事務所の経験を活かしながら、自分の担当している業務に非常に参考となる情報も入手できると思っています。

インドネシアは、みなさんご存知のように島国で、季節は乾季と雨季に別れて、気温は平均して25℃～27℃です。出発日はちょうど北京に寒気が流れてきた日であり最低気温が-1℃でしたが、ジャカルタの最低気温は24度でしたので、著しい寒暖の差を体験することになりました。

なお、インドネシアでは、バリ島爆発事件後、セキュリティチェックが非常に厳しく、車や人がビジネスビルやホテルのゲートに入る時には、車内チェックを受けたり、空港のセキュリティチェックと同じような設備でチェックを受けなければなりません。

また、ジャカルタの交通状況は北京と同じように渋滞がひどく、30分の道路を2時間もかかる場合が常のようです。特に、町中ではバイクが大変多い印象がありました。また、公共バスが走る時にドアを開いたまま走っているのが普通のようにあり、とてもびっくりしました。



日航ホテルの玄関のセキュリティチェック

業務が終わった後にチャレンジしてバスに乗り、写真も取りました。



上：バイクの多いジャカルタの街



左：バスからの眺め

1969年に設立されたインドネシア事務所は、現在、JICA 在外事務所の中で一番大きい事務所であり、日本人の所員や調整員などは31名、ナショナルスタッフは49名の計80名の大所帯ですが、中国事務所と同じで女性が圧倒的に多い状況でした。

今回のインドネシア事務所への出張では主にナショナルスタッフのバンバンさん(Mr.Bambang)から事務所の業務について説明を受けました。バンバンさんは非常に親切にインドネシア事務所の全体状況やナショナルスタッフの研修、評価等の方法を紹介してくださいました。

なお、インドネシア事務所ではナショナルスタッフ研修

の一環として、ランチタイムを多めに活用しているそうです。例えば、出張の報告会や業務関連のプレゼンテーション、所員の歓送迎会等をランチタイムで行うことが慣例となっているそうです。今後、中国事務所でもランチタイムを活用した研修会などを企画していきたいと思っています。(総務班/屈維)



インドネシア事務所の Mr.Bambang

(3) 中央党校訪日研修団が無事帰国！

中国共産党若手幹部を対象として日本への理解を促進する平成18年度「中国中央党校訪日研修団」(団長・孫慶聚中央党校副校長)一行83名が10月15日に訪日し、日本側関係者との意見交換や施設見学などを通じて見聞を深め、11月1日に無事帰国しました。この訪日団は、主に各中央官庁の司长・局長クラスの幹部や国有企業の取締役、有名な大学の校長等で構成されており、参加者は、将来中国国内の社会・経済面で重要な役割を担うことが期待されています。

「中国共産党中央党校」は同党幹部の研修機関として知られており、1993年10月から2003年10月までの10年間、胡錦濤国家主席が校長を務めていたことでも知られています。今回の訪日研修参加者は同校で長期研修中の中央・地方の政府機関等の若手幹部で、東京での合同研修の後、分野別(行政、経済、環境)に別れて北海道、兵庫、愛知、九州を視察しました。

この研修は2000年以来毎年実施されており、今年で計7回目となりますが、今年は昨年度と同様、地方活動においてホームステイも行われました。参加者たちは日本人の日常生活を実体験するとともに、市民との直接交流を通じて日本と日本人に対する理解をより深めることができたようです。(業務班/林哲浩)

(4) 新しい出会いの毎日

～研修員オリエンテーションを担当して～

私は訪日研修の仕事を担当しており、研修員が日

本に行く前に行うオリエンテーションを毎週 2 回ずつ実施しています。JICA に入ってこの仕事を担当して4年間、様々な研修員に出会ってきました。

初めの頃は、オリエンテーションといっても、ドキドキして、前任者のマネだけでせいっぱいでした。しかし段々と JICA の仕事に対する理解を深めるにつれ、自分なりの工夫をとり入れることができるようになってきました。特に、ほとんどの研修員にとっては初めての日本訪問ですので研修員にとって生活に役立つような情報の収集、日本語の簡単な挨拶、服装の準備、お土産のアドバイス、マナーなど、中国との違いについて細かく説明するように気をつけています。

私は元々口下手で、最初は緊張もしていたので、私ばかりが一方向的に話してしまい、時々は声が震えてしまった時もありました。しかし段々と、馴れてきた最近では、研修員とのやりとりを交えながら説明しています。

例えば、プロジェクトの C/P が研修に参加するときには、プロジェクトの状況を私から尋ねたり、逆に研修員からプロジェクトのことを教えてもらうこともあるので、私にとってもとても勉強になる機会となっています。

なお、研修員の中には、日本どころか初めて外国に行くケースも多く、特に女性の場合、すごく不安になる研修員もいます。中にはご主人と一緒にオリエンテーションに出席して励ましていたケースもありました。そんな時は、私もできるだけ研修員の心を落ち着かせようと、可能な限りきめ細かい情報を提供し、安心させるよう気をつけています。

また、逆に、中央機関の公務員の研修員は外国へ行く機会が多いため、余りこの機会を十分重視してない研修員もいます。その場合はまず異文化を尊重する大切さ、自分を乗り越えることにより成長することも研修の意義だと伝えたりしています。



研修員にオリエンテーションを実施している沈暁静

JICA の研修に参加する人たちは各分野で活躍している人材ですので、理解能力は非常に高く、このような説明をすぐに理解し、効果が直ちに現れると

きも多いです。また、ほとんどの研修員はとても謙虚で、訪日研修に多くを期待し、日本の先進技術を身に付けようと、そして日本の文化を体験しようという気持ちが非常に強いように思います。

研修員の中には、日本での研修を終えて、帰国した後に、メールを送ってくれたり、事務所に訪問したり等、彼らの日本での感想や意見、JICA の国内機関の最新情報などを私に教えてくれる人もいます。私はこういうときがとてうれしいですし、このような出合いを大事にしたいと思っています。帰国した彼らと意見交換のメールをしながら、また、新しい情報を次の研修員に伝えている毎日です。

この仕事を担当して4年たった今でも、研修員に会うとドキドキし、新鮮な気持ちがどんどん湧いてきます。それは毎日出会う研修員が違い、私の毎日の挑戦も違うからだと思います。

(相互理解班/沈暁静)

2. 主な調査団(派遣中・派遣予定)(11-12月)

農村社会養老保険制度整備調査 本格調査

(11/8-12/16)

長田団長

太湖 PJ 運営指導調査団 (11/7-11/12)

大久保恭子団長

水利権制度整備調査 (11/26-12/2) 石渡団員

3. 今月の行事

2006 年度青招第17 陣「中国地方青年招聘計画」

及び「JOCV 日本語教師招聘計画」

循環型経済発展の促進現地国内研修(11/2~12/8)

4. 専門家・ボランティアコーナー

先月から設置した専門家とボランティアからの投稿コーナーでは、今月は、鉄鋼業環境保護技術向上プロジェクトの合田業務調整員からと、内蒙古で活動している JOCV の大和隊員(日本語教師)からの投稿が届きました。

「週末登山だけのはずが……」

大学時代に冬山だ沢だ岩のゲレンデだと、年間 100 日以上も北国の山々に通い続けた自分も、大学卒業後は

ぷつぷつと足を洗ってしまった。あれから 14 年。運動不足解消を狙って昨年冬に北京郊外の香山に登ったが、その時は「北京に住む間、郊外の山に登れたら素敵だな」と思っただけだった。それが 1 年も経たないうちに山仲間も増え、結局、91 年以來本当に久しぶりの高所登山にまで行き着いてしまった。



河北省小五台山にて

日本では国土地理院の地形図は大型書店で簡単に手に入るが、中国では一転して軍事機密となる。最近使われだした GPS も地形図の代わりとまではいかず、自由な個人山行は困難だ。私はまず、「緑野」、「三夫」等のインターネット・サイトで公募する登山に参加してみた。日帰りや週末登山が中心だが、GW や国慶節のトレッキングや高所登山も企画される。各山行では事前にリーダーが決められ、詳細なリーダー認定制度を有するサイトも中にはあるが、日本の社会人山岳会とは異なる「公募制」である以上、緊急時に際しては「自分の身は自分で守る」覚悟が必要だ。一方、友人を作りやすい中国人のメンタリティーに、こうした登山形態は合致している。公募制登山の普及は昨今のインターネットや携帯電話の急速な普及と密接な関係があり、中国において、登山をはじめとするアウトドアの普及の大きな推進力となっている。私もお陰で随分と山仲間ができたが、初心者の多い活動に物足りなくなり、次第に限られた仲間と組んで出かけることが多くなった。そして、今年の国慶節には、そうした中国の友人 2 人と共に四川省の 5,000m 級の雪山に登った。

装備は殆ど全てを揃えなおしたが、中国の登山用品が高価なのに驚いた。一定の品質を望むなら、日本並みの出費を覚悟しなければならない。まだまだ「金持ちの道楽」の域を出ないが、急激な都市化と少子化で人

間関係が希薄になり、社会的ストレスが増大しているとされる中国の大都市において、アウトドア産業が大きなニーズを有しているのは確かだ。

北京の山好きの「聖地」とされる「小五台山(河北省の 2,800m 前後の連峰)」の東台登山口が今年の夏、地元農民によって封鎖された事件は、当時盛んに同山域に通っていた私にとって驚きだった。「現地環境保全部門が徴収する入山料は、本来登山道周辺環境整備(ごみ拾い等)に使われるはずなのに、実際には心無い登山客の捨てたゴミや排泄物が散乱し、山麓地下水の水質悪化を招いている」というのが彼らの言い分だ(※水質悪化の程度については検証の余地あり)。山麓には趙さん親子が経営する民宿があり、周囲が羨む収入を得ている。現地管理部門は彼らだけに民宿経営を許可しており、それが他の農民の不満の種なのも今回の事件と無関係ではないだろう。そして、今後我々が引き続きこの山域をフィールドにできるかどうかは、何よりも我々登山者自身の行動にかかっている。



四川省スークーニャン山三峰

日本の自然は世界一美しいのだから、わざわざ日本から中国までアウトドアに出かける必要はない。とはいえ中国に住むからには、その自然を体感するのも悪くはないだろう。そして、富士山が最高峰の日本において、5,000m 以上の本格的な高度障害を経験することは不可能だ。「学生時代じゃないのよ！」週末になるといそいそと山に出かける私に対して、家人は不満の色を隠せない。その度に、「日中両国の若者が『同じ釜の飯を食う』ことの意義は決して小さくないんだ」と、もっともらしく言い訳をする自分である。(鉄鋼業環境保護技術向上プロジェクト/合田祐介)

内蒙古の名産

内蒙古といえば、羊、草原、モンゴル族をイメージなさる方がほとんどでしょう。しかし、忘れてはならない、もう一つの知られざる名産があることを…。



私の住む、ここ赤峰市には、北京ダックならぬ、赤峰ダックというものが存在しています。赴任した当初は、「またまた、大都会、北京の真似ごとになってしちゃって！」と、ちょっと可愛いなあまで思っていたのですが、ここでの暮らしが長くなるにつれて、赤峰市民は、この赤峰ダックに誇りさえ持っていることに気がつかされたのです。その理由には、「北京ダックは、おいしいです。」と言おうものなら、「いや、赤峰ダックの方がおいしいさ。」と反論までされることや、赤峰から北京までの列車内の全座席のシートには、大々的に『草原鴨』と題して、赤峰ダック専門店の広告がプリントされているのです。また、市内にも赤峰ダックを味わえるレストランが、結構あるのです。これらから見て、世の人々は、ダックは北京の特産だと思いがちですが、実は、ここ赤峰の特産でもあるということをお分かりいただけただけでしょうか。(内蒙古 赤峰市 競沢中学 日本語教師 16-3 大和 純子)

5. 帰国研修員からのお便り

JICA では年間たくさんの研修員を日本に送り出しています。今回、2002 年～2005 年の間、九州大学で長期研修員として派遣され、博士号を取得された葛さんから、研修中のことを振り返ったお便りをいただきましたのでご紹介します。

掛け替えのない日本での留學生活と現在の私

11 月 20 日、私は JICA の長期研修員帰国報告会に出席し、JICA 中国事務所の旧知の友人らと再会した。彼女たちと言葉を交し合ったひととき、それは懐かしく、また家庭的な暖かさにあふれるものだった。この3、4年、

私は彼女たちの世話になりっぱなしだったとも言える。むろん、日本国内の JICA 関係者も含めてのことだが…。



日本一般家族訪問（右から三番目は葛偉軍長期研修員）

もし 2002 年の夏に日本へ行っていなかったら、今自分が何をしているか想像すらできない。偶然かかってきた1本の電話がきっかけとなり、それが私の人生を変えたのだ。無論、私のために動いてくれた多くの方の努力もその契機になっている。JICA、上海市科学技術委員会、上海法律家協会、科学技術部、いずれの関係者も私の日本留学のため心を砕き、尽力してくれた。ここ数年受けた恩顧に対し、私は心から感謝しているが、その強い思いは、単に「ありがとう」という言葉だけで表せるものではない。

日本留学、それは私の人生における最も大きな財産の一つだ。イギリス留学と比較しても、日本で学んだことのほうがより大きい気がする。2000 年から 2001 年にかけて私は英国で法律の修士課程を習得した。その 1 年間の生活はほぼ学習に支配され、イギリス社会に溶け込む余裕はほとんどなかった。



日本の小学生と一緒に（右は葛偉軍長期研修員）

文化的差異のためか、法律体系や授業形式も中国と

は大きく異なっており、習得も容易ではなかった。一度留学経験があったとはいえ、2002年に日本へ行く前もやはり気持ちの上で余裕はなかった。それは主に日本に対する理解不足によるものだった。

しかし、実際に行ってみると、日本での学習スタイルはイギリスとはまるで違っていた。まず日中間の文化的近似性から適応もしやすかったし、法体系も類似のものであった。法律用語の多くが日中で同語彙を用いており、極めて身近に感じた。また、北九州の JICA 九州センターと JICE 関係者が絶えず私の学習状況や生活のことを気にかけてくれたおかげ

で、異郷に身を置いている気もあまりしなかった。

もともと日本語は全く学んでいなかったが、留学最終年に日本語能力試験の1級に合格することができた。これは大きな収穫だった。何事もゼロから始めなければならないが、未来において果実が黙って自分を待っているわけではない。苦労を経験し、それを克服する強い意思を持ち続けた者だけが最後に勝利できるのだ。

JICA は援助機関である。九州大学での留学中、JICA は研修員向けに「環境と発展」「児童と障害者のための福祉活動」等一連のイベントを企画してくれた。これらの活動に参加したおかげで、自分が身を置く生活環境と社会への理解も深まったが、同時に日本におけるボランティア活動の質の高さにも感嘆した。日本の障害者福祉施設を見学し、そこにいる恵まれた障害者の明るい表情を目のあたりにすると、思わずわが国の現状を省みずにはいられなかった。世界最大の人口を有するわが国では、まだ食事も満足にありつけない人があとどれほど多くいることだろう。また障害を持つことで差別や蔑視の対象となっている人、貧困にあえぐ人が何と多いことか。日本は多くの領域で世界をリードしているが、中国はこれらの先進的理念・技術・手法をより学ぶべきだろう。

日本留学により、私は会社法関係の見識を高めることができた。こうして自分が学んだことを中国の若い人たちに伝えられたらさぞかし有意義なことだろう。その思いが昂じ、2005年夏の博士課程終了前から私は中国国内の大学とコンタクトをとり始めた。そして今年初め、この理想の一步を踏み出すことに成功した。在、私は上海財経大学法学院で商法や会社法等について講義している。教壇に立ち、判例の解説や法原理について説明していると、充実感を覚える。ひょっとすると、他人のために何かをすること、それは一種の満足その

ものなのかもしれない。

2006年11月30日

葛 偉軍

(元長期研修員、現上海財経大学法学院公司法講師)

専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所周南(zhounan.cn@jica.go.jp)あてにお願いいたします。